【研究ノート】

哲学の本質をめぐる諸立場の整理

角田 將太郎 [1]

人間は古来より、世界や自らの存在について根本的な疑問を抱き、知識や価値、真理を探求してきた。こうした問いを扱う営みは「哲学」として一括されてきたが、その定義や範囲については、いまだに哲学者たちの間で見解の一致を見ていない。「哲学とは何か」という問いに関心を持つ哲学者のうち、一部の哲学者は、哲学には特有の本質や方法があると主張する一方で、他の哲学者は、哲学と他の学問や知的活動との境界は曖昧なものとみなしている。

哲学の在り方が多様に解釈される中で、哲学の本質や目的、方法を問い直す動きが活発になっている。哲学がどのような役割を果たすべきかを検討することは、哲学の学問としての基盤を整えるだけでなく、他の学問や社会との連携を見直す契機ともなっている。本稿では、「哲学とは何か」という根本的な問いに対するいくつかの立場を整理し、それぞれの特徴や問題点を考察することを通じて、現代における哲学の本質や役割を包括的に理解するための手がかりを提供することを目指す [2]。

1. 哲学とは何かーデフレ主義

「哲学とは何か」という問いに対する答え方は哲学者によって様々である [3]。中には、哲学を哲学たらしめている本質のようなものが存在するわけではなく、したがって他の学問との区別にもさしたる重要性はないと考える者もいる。この立場では、いま哲学とみなされているものには、論理学・政治哲学・

1　東京大学大学院総合文化研究科修士課程。

2　「哲学とは何か」という問いは「何を哲学とみなすべきか」という規範的な問いとして理解することもできるが、本稿では「哲学とみなされているものとはどのようなものなのか」という記述的な問いとして考える。

3　哲学の本質に関する議論の整理にあたっては Overgaard et al. (2013) を参照している。

メタ倫理学・認識論・フェミニズム哲学など、多くの観点で異なるものが多数あり、それら全てに共通するような特徴はないと考える。たとえば、クワインは哲学とは単に「学部長や図書館員が、科学や学問の無数のトピックや問題を管理可能な数の見出しにまとめる際に用いる包括的な用語のひとつ」（Quine 1975, p. 228）に過ぎないと考える。このような立場をここでは「デフレ主義」と呼ぶ[4]。

確かに哲学とみなされているものは極めて雑多であり、それらに本質的な特徴を見出すことは困難であるように思われる。とはいえ、われわれはデフレ主義的な答えで満足しても良いのだろうか。デフレ主義を受け入れることは、哲学の範囲を曖昧にする。「あれもこれも哲学である」と言えてしまう状況を生み出し、われわれが哲学について語る際の基盤を不安定にしてしまう。

また、そもそも哲学の本質が本当に存在しないと言えるのか、という疑問も残る。そこで、次節で哲学には本質が存在するとする立場の検討を試みる。

2. 哲学とは何か－本質主義

哲学には本質が存在するとする立場は本質主義と呼ばれる。本質主義は観点の違いにより、いくつかの種類に分けられる。

2.1 主題に関する本質主義

最初に哲学の本質をそれが扱う主題に求めようとする考え方を検討してみよう。たとえばセラーズは「哲学は最も広い意味での事物が最も広い意味でどのように関連しているのかを理解することを目指すものである」「哲学の特徴は、特定の研究対象を持つことではなく、あらゆる専門分野の研究対象に関して『道筋を知る』ことを目指す点にある」（Sellars, 1991, pp. 1-2）と述べている。こ

4　Overgaard et al. (2013) がクワインの哲学観を ” deflationary view” と称していることに由来している。

こで「道筋を知る」とは、各分野における対象を単にその枠組み内で理解するのではなく、分野を横断し、対象同士が整合性をもってどのように結びついているのかを理解するということを指す。つまり、哲学はあらゆるものをその全体性の中で対象とするとされている。しかし、この定義は、あまりに広すぎる。他のあらゆる学問や知的活動を含んでしまい、それらとの区別を困難にする。哲学に特有の特徴を示すのに、この定義は緩すぎる。

では、もう少し主題の範囲を狭く取ってみるのはどうだろうか。レッシャーは「哲学は世界の仕組みとその中での私たちの位置に関する大きな問いに対して満足のいく答えを提供するという特有の使命によって特徴付けられる」とし、大きな問いを「知識と真理、正義と道徳、美と善」にまつわるものであると述べている（Rescher 2012, p. 1）。しかし、この定義にも問題がある。例えば、ナーミアらは人々の自由意志に対する考え方に関する質問紙による調査を行った（Nahmias et al. 2008）。この研究は実験哲学の重要な研究成果とされているが、レッシャーの考える「大きな問い」の内に入るのだろうか。仮に入るとして、その場合、実験心理学の様々な研究を哲学に含むことになってしまわないだろうか。

セラーズやレッシャーの考え方のように、主題によって哲学の本質を定めようとする試みは、いずれの定義も哲学でないものを含んでしまうか、本来哲学であるはずのものを排除してしまう。特に諸科学との違いを見出すことに困難を抱えることになる。

2.2 方法論に関する本質主義

次に哲学の本質をその方法によって定義できるとする考え方について検討する。伝統的に、哲学は論理的推論や理性的な議論を通じて、真理の発見を目指してきた。このことから実験による検証を重視する自然科学と区別して、「哲学は論証によって真理を探究する営みである」と定義できると考えるかもしれない。しかし、この定義では数学や他の諸科学を含んでしまうことになり、哲学に限定されなくなってしまう。では、もう少し狭めて「哲学はアプリオリな

概念分析を手法とするものである」と考えるのはどうだろうか。この定義であれば、哲学から他の多くの諸科学を除くことができる。しかし、実存主義や現象学といった大陸哲学の大部分や分析哲学のいくつかの部分を除外してしまうことになる可能性がある。

方法論に関する本質主義も、いずれの定義も哲学でないものを含んでしまうか、本来哲学であるはずのものを排除してしまう形になってしまう。また、科学との違いを見出すにあたっては、方法論的自然主義に対する批判や応答が必要になる。方法論的自然主義とは「哲学は本質的に科学と同じ仕方で体系的な理論構築を行なっている」と考える立場である[5]。この立場では、哲学と科学を連続的なものと見なし、哲学も科学的手法や理論構築の一部とみなす。

ただ、方法論的自然主義に対しては次のような反論が可能だろう。哲学は、論証を行う際にしばしば直観を証拠として用いる。例えば、「ある命題が明らかに正しい」という直観が哲学的議論の出発点になることがある。こうした直観的手法は、観察や実験に基づく科学的手法とは異なるため、哲学を科学と同一視することへの反論になるように思われる[6]。

しかし、科学は直観を使用していないと言えるだろうか。例えば、数学においては数学的真理が人間の直観に依存すると考える立場があり、それは直観主義と呼ばれる。また、他の諸科学においても理論形成や仮説生成の初期段階では、研究者の直観が重要な役割を果たしている。したがって、直観に哲学の本質を求め、科学と区別しようとする試みも困難であるように思われる。

2.3 態度に関する本質主義

5　方法論的自然主義には、議論の文脈によって記述的な意味と規範的な意味の両方が含まれる場合がある。記述的には、哲学が現実的に科学の手法や成果に依存しているという事実を指す。一方で、規範的には、哲学が科学のように振る舞うべきだという指導的な要請や価値判断を伴う。

6　それ以上の正当化を必要としないという点で、観察と直観は類比的と言えるのではないか、という再反論が考えられる。確かに認識論的身分においては直感と観察は類比的だと言えるだろう。それ以上の正当化を必要としないと同時に直感も観察も誤りうる。しかし、観察はその内容が現実であるのに対し、哲学的な直観は仮想的なものを含みうるという点で違いがあると言えるだろう。

主題や方法論ではなく、その態度に哲学の本質を見出そうとする考え方もある。哲学はその語源から「知を愛することである」と古くから言われてきたが、これをそのまま哲学の定義だと考える立場は態度に関する本質主義に分類される。「知を愛する」とはどういうことなのか、その解釈次第ではあるのだが、額面通りに「哲学とは知を愛することである」と受け取るのならば、他のあらゆる人文科学や自然科学を哲学の内に引き込んでしまいかねない。それのみならず、一般に哲学と呼ばれることのない様々な知的実践に哲学の名を与えることになってしまうだろう。

「知を愛する」を額面通りに受け取ったことが間違いだったのかもしれない。「知を愛する」を「あらゆる既存の知識を一度疑い、普遍的な知識を探し求める」と解釈してみたらどうだろうか。一見、多くの哲学の営みがこの態度に当てはまるように思われるかもしれない。しかし、ポストモダニズムなど、普遍的な知識や真理の概念そのものを疑問視するような立場を哲学として認めないことになってしまう。そのような点から、「あらゆる既存の知識を一度疑い、普遍的な知識を探し求める」という態度に哲学の本質を見出すことは難しい。また、態度から哲学の本質を見出そうとする考え方は、それぞれの別の仕方で、いずれの定義も哲学でないものを含んでしまうか、本来哲学であるはずのものを排除してしまうことになり、態度に関する本質主義もうまくいかない。

2.4 ハイブリッドな本質主義

ここまでの本質主義は単一の観点から問いに対する答えを与えようとしていた。しかし、主題や方法論、態度といった観点は排反的ではない。むしろ、主題や方法論、態度など様々な観点に関する本質主義を組み合わせることで「哲学とは何か」という問いに対して満足のいく答えに近づくように思われる。このように考える立場をここではハイブリッドな本質主義と呼ぶ。

例えば、方法論に関する本質主義として「哲学は論証によって真理を探究する営みである」という考え方を紹介したが、これは数学や他の諸科学を含んで

しまうことになり、哲学に限定されなくなってしまうという問題点を抱えていた。これに主題に関する本質主義として紹介したレッシャーの「哲学は世界の仕組みとその中での私たちの位置に関する大きな問いに対して満足のいく答えを提供するという特有の使命によって特徴付けられる」という考え方を組み合わせてみよう。レッシャーは「大きな問い」を「知識と真理、正義と道徳、美と善」にまつわるものであると述べていた。すると、ここでの哲学の定義は次のようなものになるだろう。すなわち、「哲学とは大きな問いー知識と真理、正義と道徳、美と善について、論証によって真理を探究する営みである」というようなものである。これにより、他の多くの諸科学を含んでしまうという問題点を解消することができるように思われる。しかし、一方で、レッシャーの定義が抱えていた実験哲学はどのように位置付けられるかという問題について、明確に実験哲学を除外する形になり、解決の糸口を失うことになってしまう。

上述の例はうまくいかなったケースであり、解決すべき課題も残されていながらも、ハイブリッドな本質主義はうまくいく可能性を示している。単一の観点から問いに答えようとするこれまでの本質主義と比べ、ハイブリッドな本質主義は、複数の観点から哲学を特徴付け、その輪郭を浮かび上がらせることができる。そのため、ここまでの他の方策と比べ、「哲学とは何か」という問いに対する満足のいく答えに、より近づきうる方策だろう。

ハイブリッドな本質主義は有望な方策だろう。しかし、どこまでいけるかはわからない。これまでの他の本質主義と同様に、哲学ではないものを含んでしまったり、本来哲学であるものを除外してしまう可能性がある。また、ニーチェのような散文的表現のものや、プラトンのような対話的表現のものなども含む、包括的な本質を見出すことができるだろうか。さらに、哲学と呼ばれる営みを全て含みつつ、科学と区別された形で本質を見出すことができるだろうか。これらの問いに対する検討は引き続き進められなければならない。

3. 哲学とは何かー家族的類似性

デフレ主義は哲学を哲学たらしめている本質のようなものが存在するわけではないと考える立場であった。一方、本質主義は哲学には本質が存在するとする立場であった。これらとは異なる第三の立場として家族的類似性に拠って立つ考え方がある[7]。

家族的類似性とは、ある語について、その語のすべての使用に共通する本質的な特徴があるのではなく、それぞれは部分的に似ているものの、それぞれが共有する特徴の組み合わせが異なるとする考え方である。この考え方を提案したウィトゲンシュタインは次のような例を用いて説明している。

娘の鼻は母のとそっくりだが、父のとはまるで違う。しかし、目は父と娘でよく似ている。――家族全員に共通する類似点がない場合でも、我々はその家族を似通った全体として見ることができる。（ウィトゲンシュタイン 1976, p. 145）

この考えを「哲学とは何か」という問いに適用すると、哲学的営みが持つ特徴はすべて共通していなくとも、部分的に重なり合う複雑なネットワークを形成していると捉えることができる。たとえば、哲学的実践の中には「世界の仕組みや人間の位置に関する大きな問いを扱う」「論証を通じて真理を探究する」といった特徴を持つものが多いが、すべての哲学的実践がこれらを兼ね備えているわけではない。家族的類似性主義は、これら多様な営みを部分的な類似のネットワークとして理解することを可能にする。

この立場は、デフレ主義のように哲学の本質を完全に否定するわけでもなく、本質主義のように厳密な定義に固執して哲学に含めたいはずの営みを排除するものでもない。そのため、哲学の多様な営みを柔軟に捉えることが可能であり、特定の要素にこだわらず、部分的な類似性に基づいて全体像を描き出すアプローチとして有効だと考えられる。ただ、一方で、前節で紹介した本質主義と同様に、これまで哲学ではないとされてきたものを哲学の家族的類似性のネットワークの内側に取り込んでしまう懸念は残るものと思われる。

7　家族的類似性を基にする考え方をデフレ主義のひとつとみなす場合もある（Overgaard et al. 2013）。

4. 哲学とは何かーベイズ的更新

科学哲学において、科学と非科学を区別する「境界設定問題」は長年にわたって議論されてきた。従来のアプローチは、科学と疑似科学を明確に分けるための絶対的な基準を求めたが、現実には例外が多く、厳密な線引きが困難であることが指摘されてきた。

これに対し、伊勢田（2010）は「ベイズ的更新」に基づく新たな解決策を提示している。この手法では、科学と非科学を固定的に分類するのではなく、証拠に基づいて信念を段階的に更新し、科学度を評価する。科学度は連続的な尺度として捉えられ、典型的な科学や疑似科学の特徴をもとに相対的に判断される。このアプローチは、哲学の範囲と役割を動的に再評価する可能性をもたらす。

哲学には多様な主題や方法論が含まれ、それらすべてに共通する本質を見出すことは困難である。しかし、ベイズ的更新の発想を取り入れれば、各哲学的営みの特徴や蓄積された議論に基づき、それが哲学に属するかを柔軟に評価できる。これにより、哲学の定義を固定化することなく、哲学とみなされるべき営みを適切に位置づけることが可能となり、その動的な性質がより明確に浮かび上がる。

また、ベイズ的更新は、哲学が科学と同様に合理的な判断を行っていることを示唆する。この手法は、哲学的仮説や概念が進歩を見せにくい理由を説明する手がかりともなる。証拠の不足や曖昧さによって更新が遅れることがあるが、それは科学理論の進化と同様に、時間をかけて改訂されるプロセスを経ていると考えられる。

一方で、このアプローチには課題も存在する。哲学においては、すべての問いや仮説が確率的に数値化できるわけではなく、主観的な判断の正当化についても議論の余地がある。それでもなお、ベイズ的更新は、哲学と科学を連続的な営みとして捉え、哲学の多様な営みを統合的に説明するための重要な視座を提供するものである。

5. まとめ

本稿では、「哲学とは何か」という問いに対する様々な立場を検討した。まず、哲学には本質が存在しないとするデフレ主義を紹介し、それが哲学の範囲を曖昧にしてしまうという問題点を指摘した。次に、哲学の本質を主題・方法論・態度といった観点から定義しようとする本質主義について考察したが、それぞれの観点には科学や他の知的活動と区別する点で限界があることが明らかとなった。これらの問題に対処するために、複数の観点を組み合わせるハイブリッドな本質主義も検討した。さらに、ウィトゲンシュタインの家族的類似性を基にした立場が、哲学を固定的な定義ではなく部分的な共通性のネットワークとして捉える可能性を示した。最後には、科学哲学における境界設定問題に関連する伊勢田哲治のベイズ的更新アプローチを応用し、哲学を証拠に基づいて仮説や知識を動的に更新する営みとして再評価した。このアプローチは、哲学と科学の連続性を示し、哲学が進歩を見せにくい理由を合理的に説明する手がかりを提供するものである。今後の研究においては、これらの立場の統合を図りつつ、哲学の多様な営みを包括的に説明する新たな理論的枠組みが求められるだろう。

参考文献

Nahmias, Eddy, Morris, Stephen, Nadelhoffer, Thomas, & Turner, Jason. (2008) “Is incompatibilism intuitive?” In Joshua Michael Knobe & Shaun Nichols (eds.), *Experimental Philosophy*. Oxford University Press. pp. 28-53.

Overgaard, S., Gilbert, P., & Burwood, S. (2013) *An Introduction to Metaphilosophy*. Cambridge University Press.

Quine, W. V. O. (1975) “A Letter to Mr. Ostermann.” In Bontempo and Odell (eds.), *The Owl of Minerva: Philosophers on Philosophy*. McGraw-Hill. pp. 227-230.

Rescher, N. (2012) *On the Nature of Philosophy and Other Philosophical Essays*. Walter de Gruyter.

Sellars, W. (1991) *Science, Perception and Reality*. Ridgeview Publishing Company.

ウィトゲンシュタイン , L. (1976)『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』藤本隆志訳 , 大修館書店 .

伊勢田哲治 . (2010)「科学哲学と境界設定問題の再検討」,『科学哲学』, 43(1). pp. 1-20.